

# 中国語の語彙近代化と言語生態

## —新語の群生と「適者生存」のメカニズム—

神奈川大学 彭 国躍

キーワード： 言語生態 語彙移植 環境因子 フィルター 淘汰

### 1. はじめに

18 世紀から 20 世紀初頭にかけて、西欧近代の啓蒙思想の普及、産業革命の影響および植民地の拡張などにより、人間社会において人種、国家、文化、言語などの相互間の接触、交流がかつてない規模で展開されていた。その間欧米諸国の近代化の潮流が地球規模で広がり、アジア諸国にも西洋化、近代化の波が押し寄せた。19 世紀末頃から中国は、西欧諸国の近代化と「脱亜入欧」によりいち早く西洋化した明治日本の影響を受けながら、近代化の模索を始めた。社会、経済、産業、教育などと共に、言語も近代化議論の俎上に上がった。

清朝末と中華民国初頭頃にあたるその時代に、人文・社会科学や自然科学の知識・情報の爆発的增加に伴い、新しい概念を表す新造語が大量に求められ、中国語の語彙拡充が喫緊の時代要請となっていた。そして、英語を中心とする欧米言語からの外来語、日本語からの漢字表記語、旧上海租界のピジン英語「ヤンチンパン (洋涇浜)」や旧満洲国のピジン中国語「協和語」などに由来する新語の群生現象が発生していた。

本発表では、生態言語学の枠組みを導入し、中国語の語彙近代化の一環としての新語の発生、継承、伝播と消滅のプロセスについて、多様な環境因子の相互作用と「適者生存」の生態原理という視点から分析を試みたいと思う。

### 2. 生態言語学の視点

言語は、人間と環境との相互作用によって創出された記号システムである。言語そのものは、生物学的な意味での生命体ではないが、人間という生物が置かれた複雑な自然的、社会的生存環境から影響を受けながら変化・進化を遂げると同時に、それ自体も環境の一部として人間の生態に影響を与えていく。そのことから、われわれは、自然言語を、人間社会において環境順応と環境創出の両方の機能を備えた複雑な記号システムと捉えることができる<sup>①</sup>。

言語の新生、変異、変化、接触、借用、融合、衰退などのダイナミックスの根底には、常に人間を取り巻く環境と生命体としての人間の選択判断が介在する。人間の生態環境と選択判断

---

<sup>①</sup> 言語の生態に関する理論的枠組みや実証研究について Haugen, Einar (1972)、ハールマン, ハラルト (1985)、彭国躍 (2023)を参照されたい。

には、言語使用者の個体レベルのものもあれば言語共同体の集団レベルのものもある。われわれは多様な環境因子の影響下で変容する言語の生態を実質上人間の生態の一側面とみなすことができる。

### 3. 近代中国語の新語の生態環境

外来語・借用語・造語を含む新語の発生は、語彙現象の 1 つではあるが、それには語彙論レベルでは説明しきれない多くの要素が複雑に絡んでいる。近代中国語における新語の発生、淘汰と生存のメカニズムの解明には、それを取り巻く多様な環境要因の分析を含めたより包括的な枠組みの導入が不可欠である。われわれは言語をその生態環境の視点から捉え、異なる言語の間の語彙借用を一種の移植現象とみなす場合、その移植先での受容状況に影響を与える環境因子を抽出し分析する必要がある。ここでは言語生態の環境因子について、大きく、言語外的環境因子と言語内的環境因子という 2 つのグループに分けて考える。新語の消長盛衰に与えたこの 2 種類の環境因子の影響について、それぞれ 2 つの事例を通して説明したい。

#### (1) 言語外的環境因子

言語外的環境因子として「社会的環境因子」と「認知的環境因子」という 2 つの因子群が考えられる。それぞれ 1 例ずつ挙げて説明する。

まず、宗教（キリスト教の布教活動）という社会的環境因子を取り上げる。17～19 世紀の間に中国においてキリスト教の宣教活動が活発化していた。18 世紀の中頃まではイエズス会を中心とするカトリック系の宣教師たち、19 世紀には主にプロテスタントの宣教師たちが布教活動を展開していた<sup>②</sup>。宣教師たちは、布教活動の一環として、中国語を学び中国文化を研究し、中国の知識人の協力を得ながら辞書の編纂<sup>③</sup>や西洋書物の中国語翻訳も手掛けていた。その翻訳の対象は、『聖書』などの宗教関連の書物だけでなく、数学、物理、天文、地理、医学、法律などの自然・社会科学関連の書物にも及んでいた<sup>④</sup>。その過程で大量の新思想、新概

---

② その間に中国で布教活動を行った宣教師たちは二千人を超える規模に達していた。その中には足跡を残した者として、マテオ・リッチ (Matteo Ricci 利瑪竇 1552-1610 イタリアのイエズス会宣教師)、サバティーノ・デ・ウルシス (Sabatino de Ursis 熊三抜 1575-1620 イタリアのイエズス会宣教師)、アダム・シャル (Johann Adam Shall von Bell 湯若望 1592-1666 ドイツのイエズス会宣教師)、ジョセフ・マリー・アミオ (Jean Joseph Marie Amiot 錢德明 1718-1793 フランスのイエズス会宣教師)、ロバート・モリソン (Rober Morrison 馬禮遜 1782-1834 イギリス人プロテスタント宣教師)、ウィリアム・マーティン (William Alexander Parsons Martin 丁韞良 1827-1916 アメリカ長老派宣教師) などが含まれる。

③ 宣教師たちが編纂した辞書には、モリソン (R.Morrison 馬禮遜) の『A DICTIONARY OF THE CHINESE LANGUAGE, PART III』(1822)、ウィリアムス (W.Williams 衛三畏) の『An English and Chinese Vocabulary in the Court Dialect』(1844)、メドハースト (W.H.Medhurst 麦都思) の『English and Chinese Dictionary』(1847-48)、ロブシャイド (M.Lobscheid 羅布存徳) の『English and Chinese Dictionary, with Punti and Mandarin Pronunciation』(1866-69)、ドーリットル (J.Doolittle 盧公明) の『Vocabulary and Handbook of the Chinese Language』(1872) などがあり、その一部は和刻本としても刊行され明治新漢語の形成にも影響を与えた (陳力衛 2004p.57)。

④ マテオ・リッチと徐光啓 (1562-1633) の共訳『幾何原本』(1607)、ホブソン (Benjamin Hobson 合信 1816-1873) の

念が中国語に持ち込まれ、新造語が作り出されていた。近代中国における中国語と西洋言語との接触は宣教師たちによってもたらされたと言っても決して過言ではない。キリスト教の布教活動の展開が中国における近代初期頃の新語発生の社会的環境因子の 1 つとして大きな影響を与えたことが明らかである。

次に、伝統文化に対する「優越感」と「劣等感」を含むコンプレックスという認知的環境因子を取り上げる。19 世紀中頃までの西洋の書物の流入と翻訳に続き、日清戦争 (1894) 後の 19 世紀末頃から 20 世紀初頭にかけて、明治日本の書物も大量に翻訳され、日本留学の帰国者や中国で活躍する日本人研究者の文章や著書に日本語の漢字表記語 (和製漢語と和語の漢字表記) が大量に借用されるようになった。当時の中国社会では、日本語からの借用語に対して「排斥」または「擁護」を唱える人々が現れていた<sup>⑤</sup>。排斥派は「中国語の伝統からの逸脱」「ことばの乱れの原因」などを理由に日本からの借用語の氾濫を懸念しその過剰流通に歯止めをかけようとした。清朝政府もその影響を受け学校教育指針「奏定學堂章程」<sup>⑥</sup>により日本からの借用語の使用を制限しようとした。一方、擁護派は「新国民の育成」「新思想の吸収と伝播」の方策として日本からの借用語を積極的に取り入れ、新語の産出と普及を推し進めようとした<sup>⑦</sup>。当時の中国において隣国の日本を中華文明の周辺国と見るか、アジア唯一の近代国家 (先進国) と見るか、文化的優越感と劣等感が錯綜するこの 2 つの視点の対立構造がそのまま日本語の言語威信、日本からの借用語に対する言語態度に投射されていた。このような文化的複合観念としてのコンプレックスの形成と対立は中国社会における新語の認知的環境を形成し、借用語の淘汰と定着の度合いに対して一種の文化フィルターとしての役割を果たしていた。

## (2) 言語内的環境因子

言語内的環境因子には、音韻、意味、語彙、文字などの要素にかかわる因子群が含まれる。新語の存亡に影響を与える言語内的環境因子についても 2 つの事例を通して観察したい。

---

著書『全體新論』(1851)、『博物新編』(1855)、エドキンス (Joseph Edkins 艾約瑟 1823-1905) と李善蘭 (1811-1882) との共訳『重學』(1853)、『植物學』(1859)、エドキンスと張福僖 (?-1862) との共訳『光論』(1853)、ワイリー (Alexander Whlie 偉烈垂力 1815-1887) と李善蘭との共訳『代數學』(1859)、ワイリーと王韜 (1828-1897) との共訳『西國天學源流』(1897)、ウィリアム・マーティンが 4 名の中国人 (何師孟、李大文、張煒、曹景榮) の協力を得て翻訳した『萬國公法』(1864) などが出版されている。その多くは日本でも和刻され、明治日本新漢語の創出に大きく寄与した (松井利彦 1985p.68、76、張嘉寧 1991p.391-392、孫建軍 2005p.8)。

⑤ 排斥派には張之洞 (1837-1909)、章炳麟 (1869-1936)、嚴復 (1854-1921)、林紓 (1852-1924) などが、擁護派には黃遵憲 (1848-1905)、梁啓超 (1873-1929)、譚嗣同 (1865-1898)、徐仁鏞 (1863-1990) などが含まれ、両派のどちら側にも当時中国において影響力のある著名な思想家、政治家や翻訳家が含まれていた。

⑥ 《奏定學堂章程》(1903 年制定、1904 年 1 月公布) (陳學恂主編《中國近代教育史教學參考資料 (上)》人民教育出版社, 1986 年 pp. 532-551)

⑦ 1902~08 年の間に清国北京大学堂教習を務める服部宇之吉 (1867-1939) もその中国語著書『心理學講義』(1907) の中で大量の日本語借用語を使用し、その本の凡例 (三) の中で、清国政府の「奏定學堂章程綱要」という教育指導要領で定めた新語の使用禁止令について異議を唱え、春秋戦国時代の学術や唐代の仏典翻訳に大量の新語が使用されたことに触れ、中国が外国から広く知識を吸収しようとする際には、言葉の馴染み如何を問うがために学問の発展に支障をきたしてはならないという見解を述べている (服部宇之吉 1907p.2-3)。

まず音韻と意味がかかわる環境因子の影響について考える。19 世紀末までに宣教師たちや欧米留学の帰国者たちによって導入された西洋言語由来の音訳と意識の外来語の多くは、その後日本語から借用された漢字意識語との生存競争に敗れ死語となった。「賽因斯 (science)、斐洛蘇非 (philosophy)、裴輯 (physics)、計學 (economics)、心學 (psychology)、群學 (sociology)」などのような中国で造られた新語がほとんど「科學、哲學、物理學、經濟學、心理學、社會學」などのような日本語からの借用語に取って代わられた。しかし、その中で、そのような大勢に反して、日本語由来の「論理 (學)」が中国の音訳語「邏輯 (學)」との競争で敗れ使われなくなった。西洋哲学の概念を表す「logic」という語は 17 世紀頃に宣教師たちによって中国語に翻訳・導入されたが<sup>8)</sup>、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、中国語において音訳語「邏輯學」と意識語「名學、辯學、論理學」との間で熾烈な生存競争が繰り広げられていた<sup>9)</sup>。1920~40 年の間には「邏輯學」と「論理學」が一騎打ちの状態となっていたが、その後「論理學」が淘汰され、音訳語の「邏輯學」が定着した<sup>10)</sup>。

「論理 (學)」という和製漢語が中国で淘汰された理由について、その字義的意味の不備を指摘する解釈もあるが<sup>11)</sup>、言語の生態環境というより広い視点を導入すれば、別の解釈、つまり「論理 (學)」と同じ時期に日本語から借用されたもう 1 つの哲学概念「ethics」を指す意識語「倫理 (學)」との間に同音衝突が起きたためという解釈の可能性が生まれてくる。漢字の「論 (ろん)」と「倫 (りん)」は日本語の発音では母音が異なるが、中国語では子音と母音はまったく同じである。北京語では「lùn」と「lún」のように声調は違うが、南の 3 大方言 (上海方言、福建方言、広東方言) では声調も含めてまったく同音である。そのような新語の発音と意味の生態関係を踏まえて考えると、「論理」が新語のサバイバルレースから転落したのは、「邏輯」との間にどちらの訳語が優れているかということよりも、同じ日本語からの借用語「倫理」の定着により同音衝突が起こったこと、そしてそれによる意味弁別のコスト軽減と誤解のリスク回避の必要性が生じたことが主な原因だったと解釈することができる。この解釈により、特定の新語の存亡はその語の意味表示の適切性だけの問題ではなく、新語を取り巻く言語内の生態環境からも影響を受けることが明らかになる。

次に、文字形態の環境因子が語彙拡充に与えた影響について説明する。中国語は漢字が唯一

<sup>8)</sup> イタリア人イエズス会宣教師ジュリオ・アレーニ (Aleri Giuleo 艾儒略 1582-1649) がその著書『職方外紀』の中で「落日加」と音訳し、ポルトガル人イエズス会宣教師 (Francois Furtado 傅汎際 1587-1653) が「名理探、名理學」という意識語を使用していた (聶長順 2012p.271)。

<sup>9)</sup> 日本語では明治初期の 1870 年代頃に「logic」の訳語として「致知学、理論学、名理学、論法、論辯学、論理学」などが生存競争を展開していたが、1880 年代頃には「論理学」が勝ち残り定着した (聶長順 2012p.275)。

<sup>10)</sup> 『現代汉语词典』(第 7 版、商務印書館 2017 年) の「论理学」項目の語釈では「逻辑学的旧称」と記されている。

<sup>11)</sup> 章士釗 (1943pp.1-4) は自著の『邏輯指要』の中で音訳語「邏輯」の使用を推奨し、日本語からの「論理」は logic の訳語として字義の意味が広すぎて不適切だと主張し、彼自身の長年の主張が「邏輯」の定着に寄与したと認識していたようで、沈国威 (2019p.65) もそれに基づき「邏輯」の定着と普及は章士釗の努力が実った結果だと述べている。



の書記形態である。新語はすべて漢字を通して文字化しなければならない。表意文字の漢字は、「形声符」の書記素による表音機能はあるが、音素文字のアルファベットや音節文字の仮名のような「意味付けのない」表音文字ではないため、個々の漢字の発音だけを利用して音訳外来語を構成する場合、新語の意味理解の干渉とならないように、文字の受信者は漢字の字義的意味を脳の中で一度キャンセルする必要がある<sup>12</sup>。その意味キャンセルのための認知処理には（表音文字の受信者にはない）余分のコストがかかる。漢字の表意的性質のゆえ、中国語の語彙拡充の過程において、新しく移植された概念が初期段階において音訳のまま導入することはあっても、一旦意味が浸透し広く理解されれば、言語運用と言語政策の両方のレベルにおいて、「同音衝突」などのような特定の環境因子の強い影響がなければ）漢字の表意機能を生かした意識への転換が行われる傾向がある<sup>13</sup>。中国語に借用された明治日本の漢字意識語の 9 割以上が定着したのはまさにその傾向に合致したからだとすることができる<sup>14</sup>。そして、近代初期頃の英語からの音訳外来語が 8 割以上淘汰されたのも<sup>15</sup>、また日本語の仮名表記語がまったくと言っていいほど外来語として借用されなかったのも、言語内的環境因子としての表意文字のフィルターが強力に作用したからだと解釈することができる。

### （3）生態環境の因子群

中国語の新語の生存競争の過程における基本的な生態環境の枠組みとそれにかかわる各種の因子群について、表 1 のように例示できる。

表 1 新語の生態環境と因子群例示

環境		因子群
言語外的環境	社会的環境	宗教（布教活動）、西洋化、近代化、移・植民、外交、戦争、文化圏、都市化、人口、民族、政治、経済、政策、教育、留学、翻訳、出版、メディア……
	認知的環境	コンプレックス（文化的優越感・劣等感）、言語威信、言語態度、世界観、価値観、イデオロギー、ステレオタイプ、ナショナリズム、アイデンティティ、認知処理コスト……
言語内的環境	音韻的環境	音素、子音・母音、声調、清音・濁音、有気音・無気音……
	意味的環境	意味素、概念、類義性、対義性、メタファー……
	語彙的環境	語彙素、形態素、語構成、結合関係……
	文字的環境	文字形態、書記素、表意性、表音性、異体字……

<sup>12</sup> まれに字義的意味を生かした音訳語（例えば Coca-Cola の音訳語「可口可樂」が「美味しく楽しい」意味を持つこと）もあるが、そのような造語法は偶然と工夫によるもので、基本的なパターンにはなり得ない。

<sup>13</sup> その傾向は現代中国語でも維持されている。2002 年頃に大流行した SARS は当初音訳語の「沙土」または「沙斯」が使われていたが、その後「非典型肺炎」（略称「非典」）に変更された。

<sup>14</sup> それに加え、明治日本の学術書が大量に翻訳・出版されたことも言語外的環境因子として同時に作用した。

<sup>15</sup> 高田・田中・堀田（2022p.133）の「中国語史・彭」の集計結果に基づく。

#### 4. 熾烈な生存競争の一端

異なる言語間の語彙の借用現象を「語彙移植」と捉える場合、同じ系統の言語や文字の間の移植は「同系間移植」と呼び、異なる系統の言語や文字の間の移植は「異系間移植」と呼ぶことができる。中国語と日本語の間の漢字語の借用現象は文字形態における「同系間移植」となる。一般的な傾向として同系間の移植は異系間の移植より定着率が高い。この傾向は、日本語由来の漢字表記語と英語由来の音訳外来語との比較で明らかになっている。

日本語から借用された漢字表記語には、主に日本語の音読み語と訓読み語が含まれる<sup>16)</sup>。音読み語には「政府、商品、客観、絶対」などがあり、訓読み語には「取締、引渡、入口、立場」などがある。これまで明治日本の新漢語の中国での借用問題に関する議論は、ほとんど前者の音読み語にフォーカスが当てられるが、ここでは明治時代の訓読み語、つまり和語の漢字表記語がどのように翻訳を通して中国語に移植され、その後の定着率はどのぐらいなのかを実際の翻訳例を通して観察してみる。表 2 は明治時代の『法令全書』が中国語に訳された状況を示すサンプルである。

表 2 20 世紀初頭の日本語の翻訳移植例

『法令全書』(明治 29・1896 年) 日本語原文	『新譯日本法規大全』(1907 年) <sup>17)</sup> 中国語訳文
(民法) 第七十八條 <u>清算人ノ職務左ノ如シ</u> 一 <u>現務ノ結了</u> 二 <u>債權ノ取立</u> 及ビ <u>債務ノ辨濟</u> 三 <u>殘餘財産ノ引渡</u>	(民法) 第七十八條 <u>清算人之職務如下</u> 一 <u>現務之完結</u> 。 二 <u>債權之取立</u> ，及 <u>債務之辨濟</u> 。 三 <u>殘餘財産之引渡</u> 。
第五百十條 <u>支拂命令ハ權利拘束カ其効力ヲ失フト</u> <u>キハ時効中斷ノ効力ヲ生セス</u>	第五百十條 <u>支拂命令</u> ，若 <u>權利拘束</u> ，失其效力， <u>則不生時効中斷之效力</u> 。
第五百十一條 <u>和解ノ爲メニスル呼出ハ相手方カ</u> <u>出頭セス又ハ和解ノ調ハサルトキハ一个月内ニ訴ヲ</u> <u>提起スルニ非サレハ時効中斷ノ効力ヲ生セス任意出</u> <u>頭ノ場合ニ於テ和解ノ調ハサルトキ亦同シ</u>	第五百十一條 凡因 <u>和解之呼出</u> ，若 <u>相手方</u> 不 出，或和解不成立時，非一个月内 <u>提起其訴</u> ，則 不生 <u>時効中斷之效力</u> 。若 <u>任意出頭</u> 而 <u>和解不成</u> 之 時亦同。
第五百十四條 <u>差押、假差押</u> 及ヒ <u>假處分ハ權利者ノ</u> <u>請求ニ因リ又ハ法律ノ規定ニ從ハサルニ因リテ取消</u> <u>サレタルトキハ時効中斷ノ効力ヲ生セス</u>	第五百十四條 <u>差押</u> 、 <u>假差押</u> 、 <u>假處分</u> ，因 <u>權利</u> 者之 <u>請求</u> ，或因不從 <u>法律之規定</u> 而被 <u>取消</u> ，不生 <u>時効中斷之效力</u> 。

(下線は音読み語で、二重下線はその内現代中国語ではそのまま通じない語であり、網掛けは訓読み語で、その内囲み文字の語はそのまま現代中国語では通じない語である。)

<sup>16)</sup> さらに細かく分けると、湯桶読みと重箱読みのような混合タイプもあるが、借用語の中では数が少ないのでここでは問題にしない。

<sup>17)</sup> 中国語の訳文は、『新譯日本法規大全(点校本)』(簡体字版、商務印書館 2007)に基づく。当時使用の繁体字への変換は彭による。

表 2 から、当時の日本語文に使用された漢字表記は、音読みと訓読みが区別されることなく一様に中国語に借用され、翻訳のフィルターを通過した状況が見て取れる。そして、表 2 のサンプルだけによる局所の集計ではあるが、そこに現れた音読み語は現代中国語では 23 個中 20 個が残り、残存率は 87%であるのに対し、訓読み語は現代中国語では 9 個中 2 個が残り、その残存率は 22.2%であることが観察される。日本語の漢字語が中国語に借用される場合、音韻フィルターによって日本語の音韻情報はシャットアウトされ中国語に反映されないが、語の構成過程や構成要素として音読み語は訓読み語に比べ中国語との同系性がいくらか高くなっていると言える。両者の残存率の差はその造語上の同系性を反映していることを示唆していると見ることができる<sup>18)</sup>。

さらに『新譯日本法規大全』(1907 上海商務印書館) の中で翻訳を通して移植された訓読みの同一パターンの複合語(上位 10 種類)を抽出して観察すると、次の表 3 のような定着状況が見えてくる。

表 3 訓読み語の定着状況

パターン	移植された訓読み漢字表記語	定着	残存率
とり～	取扱、取扱所、取扱方、取扱人、取締、取締役、取調、取立、取立金、取次、取纏、取計、取引、取引所 (14)	取締	7.1%
て～	手合圖、手当、手当額、手当金、手形、手數料、手漉紙、手代、手續、手帳、手荷物、手札形 (12)	手續	8.3%
さし～	差入、差押、差繰、差支、差込、差立、差出、差出人、差止、差引、差戻 (11)		0%
み～	見込額、見込違、見積、見取圖、見習、見張、見本 (7)	見習	14.3%
はらい～	拂入、拂入額、拂入金、拂込、拂下、拂戻、拂戻金 (7)		0%
たて～	立会、立会人、立寄、立寄港、立替、立替金 (6)		0%
わり～	割合、割印、割引、割増、割増金、割戻 (6)		0%
くみ～	組合、組入、組換、組替、組立、組物 (6)	組合	16.7%
し～	仕入、仕拂、仕拂金、仕向地、仕様書 (5)		0%
ひき～	引受、引換、引繼、引戻、引渡 (5)	引渡	20%
計	79	5	6.3%

表 2 と表 3 の明治『法令全書』の翻訳事例から観察された現象を次のようにまとめられる。

(1) 中国語の語彙近代化、語彙拡充の過程において、明治時代の「訓読み語(和語の漢字表記語)」が「音読み語(和製漢語)」と共に翻訳のフィルターを通過し、大量に中国語に移植されていた実態が見える。

(2) 日本語の訓読み語は、翻訳を通して中国語に移植されたものの、定着率の高い音読み

<sup>18)</sup> その詳細な原因についてさらなる構造の分析と検証が待たれる。

語とは対照的に、新しい言語生態の中でその多くが環境に適応できず淘汰された状況が見て取れる。

(3) 訓読み語の流入状況から、これまで見えなかった、当時日本からの借用語の過剰流通を心配する排斥派の学者たちの懸念や清朝政府の使用制限措置の背景となるものがある程度浮かび上がってくる。

## 5. 結び

百年前頃の中国の言語近代化と語彙拡充の過程の中で、さまざまな分野において新語の群生現象が発生し、その時代特有の言語生態が形成されていた。本発表により、その頃の新造語が言語内外の環境因子に影響され、多重のフィルターにかけられていた事実が一部明らかになった。そして、その時代に和製漢語が大量に借用され、中国の語彙近代化に一役買った一面と共に、これまでの日中間の語彙交流史研究ではほとんど触れられなかったもう 1 つの側面、つまり中国語に移植された大量の漢字訓読み語が熾烈な生存競争にさらされ、定着せずに淘汰された一側面も見えてきた。

## 参考文献

- 黄克武 2008 《新名词之戰：清末嚴復譯語與和製漢語的競賽》《中央研究院近代史集刊》(第 62 期) 中央研究院近代史研究所 pp.1-42
- 聶長順 2012 「明治日本 Logic 译名の厘定」『東アジアにおける近代諸概念の成立』(第 26 回国際研究集会) 国際日本文化研究センター pp.271-278
- 沈国威 2019 《一名之立 旬月踟躕—严复译词研究》社会科学文献出版社
- 孫建軍 2005 「西洋人宣教師の造った新漢語と造語の限界—19 世紀中頃までの漢訳洋書を中心に」『日本研究』国際日本文化研究センター紀要 pp.323-337
- 高田博行・田中牧郎・堀田隆一 2022 『言語の標準化を考える—日中英独仏の「対照言語史」の試み』大修館書店
- 張嘉寧 1991 「『万国公法』成立事情と翻訳問題—その中国語訳と和訳をめぐって」『翻訳の思想』岩波書店
- 陈学恂 1986 《奏定学堂章程》《中国近代教育史教学参考资料(上)》人民教育出版社 pp.532-551
- 陳力衛 2019 『近代知の翻訳と伝播—漢語を媒介に』三省堂書店
- 服部宇之吉 1907 『心理學講義』東亜公司
- ハールマン, ハラルト 1985 『言語生態学』大修館書店
- Haugen, Einar 1972 *The Ecology of Language*. Stanford University Press.
- 飛田良文 2008 「明治に生まれた翻訳ことば」『國文學』學燈社 pp.12-23
- 彭国躍 2023 『都市空間の言語生態—上海の言語景観と道路命名の歴史』くろしお出版
- 松井利彦 1985 「漢訳『万国公法』の熟字と近代日本漢語」『国語と国文学』至文堂 pp.67-77